

2023 年度国内研修報告書

教育学科 教授 日高俊夫

研修期間：2023 年 4 月 1 日 ～ 2024 年 3 月 31 日

研修先：甲南大学文学研究科

指導教員：中谷健太郎（甲南大学文学部教授）

1 年間にわたり、形式意味論および統計・言語実験の基礎を学びつつ語彙意味論を中心に研究を進めた。研修に伴う具体的研究成果物として、以下の 4 点の研究論文の内容を紹介し、報告とする。

1. 日高俊夫（2025 年出版予定）「状態を表す「～している」の意味的構成性」板東美智子・松井理直・澁谷みどり・日高俊夫・折田奈甫（編）『語彙主義に基づく自然言語研究』日本評論社。

本論の分析対象は、「属性描写」とされることの多い次のような文である。

- (1) a. その人形は青い目をしている。
- b. 彼女は長い髪をしている。
- c. この車は赤い色をしている。
- d. この紅茶はさわやかな味をしている。
- e. このワインは金木犀の香りをしている。
- f. この楽器はおもしろい音をしている。

これらの文については、意味的成立条件を議論した佐藤 (2003) や、(1a, b) の「身体属性文」を分析した影山 (2003, 2004) 以来、構文文法 (森山 2015) や 認知言語学 (大神 2020, 2024, 澤田 2012, 板垣 2022, 2024, 岩男 2022, 2024), 統語論や生成語彙論 (小野 2014, 岸本 2023, 小栗 2023) 等、様々な立場から分析されてきた。本論は小野 (2014) や小栗 (2023) と同様、生成語彙論の立場から分析し、次の点を主張した。

- ・当該表現は、補部名詞句、ス(ル)、テイ(ル)の構成的意味合成によって説明可能である。
- ・当該表現は、主語と「青い目」等の名詞句の間の不可分所有(inalienability) 関係を基本として成り立ち (影山 1990, 角田 1991), ス(ル)はそのことをマークする(軽)動詞でもある (影山 (2003, 2004) のような CONTROL を含む意味構造を持つものではない)。
- ・澤田 (2012) の「認知主体が能動的に環境に働きかける」「探索(活動)」はテイ(ル)が持つ語彙的な意味(状態性と観察性)に帰せられる。
- ・以上を踏まえ、この表現は、「話者の観察に基づく、対象とその不可分所有物の関係の発見表明」、つまり、話者が自身の観察を通して対象の状態を発見し、それを提示する表現であると位置付けられる。
- ・容認性判断に大きく影響するのは「証拠性」「不可分所有性」である。

本論の分析において最も大きな問題となるのは、ス(ル)を「所有」の意味を持つ動詞として分析していることであろう。生成語彙論の大きな利点のひとつは、共合成 (co-composition) や強制 (coercion) といった操作によって 1 つの語彙登録で語の多義性やコロケーションを説明できることである。小野 (2014) はこの観点からス(ル)の基本的意味を変えずに「N をする」のバリエーションの説明を試みたものと位置付けられる

だろう。小野の分析は非常に興味深いですが、「マフラーをする」と「青い目をする」では、直観的にもス(ル)の意味機能は異なっているように思われ、両者を act として分析するのは無理があるように感じられる。また、小野は本論 1.5.3 節で論じた定性 効果を否定する立場を取るが、「*そのテーブルがしているのは赤い色だ」のような文はやはり容認性が低く、そこには説明が必要だろう。

岸本 (2023) は、単純形の「する」は「行為」や「出来事の変化」を表すので、コントロールできない属性(状態)の意味を表すには「ている」形にし なければならないとしているが、その具体的理由は明確でないように思われる。本論の分析では、ス(ル)に状態性を担う語彙登録が存在し、コントロールの可否によって動作性と状態性のス(ル)が使い分けられるということになる。

本論の分析は、いわゆる第四種動詞 (金田一 1950) にも応用可能であると思われる。金田一自身も「{ 高い鼻/丸顔 } をする」を「すぐれる」「ありふれる」と同様に第四種動詞として分類している。本論のテイルの分析はこのような動詞に対しても適用できると考えられる。

また、「属性」を構文に帰さない本論の分析は、「そびえる」を属性述語、「そびえている」を事象叙述とする影山 (2012) や、三原 (2021) の「ている」の分析をさらに精密化し、日本語の状態動詞にも応用できる可能性を持つと考える。

2. 日高俊夫 (印刷中, 2025 年出版予定) 「統語的複合動詞 V-kir における意味の修復」于一楽・江口清子・小薬哲哉・眞野美穂 (編) 『レキシコン研究の広がりと深まり』大阪大学出版会。

複合動詞「V-切る」は様々な動詞を第一要素とし、その分布が語彙的複合動詞 (ex. 叩き切る, ねじり切る)・統語的複合動詞 (ex. 使い切る, 困り切る) (影山 (1993) 等) の両方にわたることからも、たびたび分析対象とされてきた (森田 (1989), 姫野 (1999), 杉村 (2008), 志賀 (2014), 梅 (2015), 日高 (2017, 2022) 等)。このうち統語的複合動詞「V-切る」を分析した日高 (2017) は、先行研究を意味の構成性の観点から批判的に検討し、-kir に 2 つの語彙登録を仮定して V-kir の意味を構成的に記述・説明できるとした。

本論は日高 (2017) を修正したものである。統語的複合動詞 V-kir における -kir は出来事の終了点を指し、そこで (比喩的に) 事象を「切る」という意味 1 つ (多義性を持たない) とし、V1 と -kir, -tei(ru) の意味合成を構成的に分析した。具体的には、極限用法と呼ばれる「疲れ切る」等の単純過去の -ta の場合 (ex. ?* 健は疲れ切った) に比して、-tei(ru) の場合 (ex. 健は疲れ切っていた) に容認性が向上する理由を、-tei(ru) の持つ客観性・証拠性を担保する意味機能 (大江 (1975)、定延 (2006)、飯田 (2019)、宮下 (2019)) に帰し、構成的な意味分析を示した。

本論の意味構造は、これまで記述・分析の難しかった心理動詞や主観述語の分析においても新たな洞察を提供するのではないかと考える。

3. 日高俊夫 (2024 年 10 月出版) 「「普通に」における語用論的意味 — 客観化・対人化—」岸本秀樹・日高俊夫・工藤和也 (編) 『レキシコン研究の新視点』開拓社。

本稿は「普通においしい」等に見られるような、2000 年代以降に登場したと思われる比較的新しい「普通に」の表す意味・用法を詳細に観察・分析することを目的とし、最終的に以下のように整理した。

(従来用法)

動作状態解釈 ex. (変な箸の使い方の人に) ちゃんと普通に箸を使え。

動詞句を修飾。「多くの人がするやり方で」という意味。

数量・程度 ex. 大盛りが常の店だが、少食の私のために普通に盛ってくれた。

動詞句を修飾。「多くの人」が数量・程度的に「標準」と評価する（と話者が思う）点や範囲を指し、ある程度の客観性を持つ。

常識的命題評価 ex. 朝ご飯くらい普通に毎日食べなさい。

言語外常識に照らし合わせて命題内容を「普通」（当然）であると解釈するもの。

（新用法）

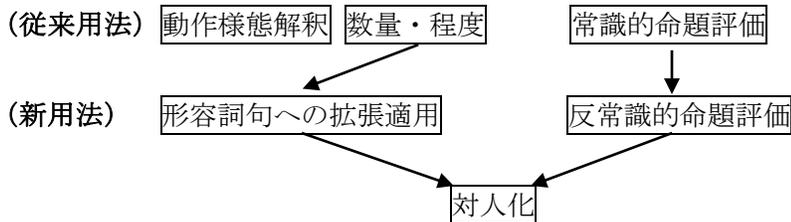
形容詞句への拡張適用 ex. 学食のラーメンは普通においしい。

感情や感覚、「長い」や「深い」など主観的・段階的な内容を表す形容詞を用いる。主体が表現する際に主体の判断としてそのまま出すのではなく、「多くの人」がそう（例えば「おいしい」など）判断する点や範囲を指すことにより、ある種の客観化を施す。その結果として主体的判断の意味合いが弱まる。

反常識的命題評価 ex. 俺は普通に丼飯を朝ご飯として食べる。

話者や行為主体の視点から、行為主体の行動について「それが普通だ」という評価を表明する。常識的命題評価用法を基盤としながらも、敢えて多数派に属さない（常識に反する）ような行為を表す命題を対象とすることで、むしろ当該行為が普通でなく、話者や主体独自のものであるという修辭的推意を逆説的に生み出す表現。

従来用法と新用法の関係



新用法の意味機能の大きな特徴は次のようにまとめられる。

- (1) a. 段階性を持つ主観的な形容詞などの述語を修飾するようになり、「多くの人」がそう（ex. 「おいしい」など）判断する点や範囲を指定することによって、その言明にある種の客観性を持たせ、自己の主観による判断であるという意味合いを薄れさせる。それに伴って自己の言明責任を一定程度回避することができる。（形容詞への拡張適用）
- b. 常識的命題評価解釈の文脈に敢えて多数派に属さない（普通でない）ような行為を話者や主体にとっての標準的行為として提示することで、むしろその行為が普通でなく、話者や主体独自のものであるという意味合い（推意）を逆説的・修辭的に生み出す。（反常識的解釈）
- c. 話者が、命題に対する自分の発話態度が「普通」であることを表明することによって、その命題内容が「素の自分の判断」に基づくことを聞き手に感じさせる効果を持つ。（対人化）

一口に「意味」といっても「普通に」の場合、根本的な意味が大きく変化しているというよりも、「普通

である」ことをどんな文脈で何に適用するかということによって、結果的に様々な意味合いが出てくるということになる。(1)の「自己の言明責任の一定程度の回避」や「話者や主体独自の標準」解釈、「話者の発話態度が普通であること」などは、いずれもいわゆる真理条件的な意味論の対象というよりは、慣習的推意などの語用論的な意味に属するものであると考えられる。これらの出处については本論でもある程度論じることができたと思うが、その内容の理論的形式化については今後の課題としたい。

ところで、これら新用法の「普通に」については若者と年配者の間でその意味をめぐってコミュニケーションに支障をきたすことも多いように思われる。本論の内容から推察すると、その原因としては、以前に比べて多義化・多用法化が進んでおり、主に年配者がそれについて行けていないということも考えられるが、それよりも重大なことは、そもそもその多義化・多用法化の原因が、昨今の、特に若者の間で広がる社会文化的風土であるかもしれないということである。

(1)にまとめたように、新用法の「普通に」は、主観的なことに客観性をまとわせて自分の主観性の度合いを薄めて提示したり、「自分の発話態度がキャラを演じたものでないこと」を(わざわざ)表明したりといった対人的機能を持つ。逆に言えばこのような対人的機能が必要になる社会言語的土壌が若者社会を中心に存在しているということではないだろうか。この、世代間によって異なる社会言語的土壌が、主に若者が使う「普通に」の正確な理解を妨げている第一義的な要因であるのかもしれない。

4. 日高俊夫(2023)「英語の軽動詞関連形関連形式における軽動詞性と構文性 —giveを主動詞とした文について—」岸本秀樹・白杵岳・于一楽(編)『構文形式と語彙情報』pp.232-256. 開拓社.

「軽動詞構文」とされることの多い(1)のような文に関する問題(2)に対して、概念意味論および生成語彙論の立場から解答することを目標とした(意味表示として、Pustejovsky(1995)を修正し、形式役割と構成役割を命題的意味、主体役割と目的役割を非命題的意味として分割表示した特質構造を用いた)。

- (1) a. The actors gave a performance of the play to the children.
- b. The actors gave the children a performance of the play.
- c. Ken gave Kathy a kiss.
- d. Harry gave the wire a twist.
- e. Bob gave a sneeze. (Cattell 1984)

- (2) a. 本動詞との関連性も含め、(1)の各 give の意味構造.
- b. give と補部名詞の意味はどのように合成されるのか(項の同定を含む).
- c. True Light Verb (TLV) と Vague Action Verb (VAV) の間に受身化等の統語操作に対して容認性の違いが生じる (Kearns 2002) 理由.
- e. 先行研究の、補部名詞の動詞形を主動詞とするよりも具体的で一般的な感覚 (popular feeling) (Curme 1931), 無意識的反応(involuntary reaction)(Jespersen 1954) を表すとの観察の理由.

まず、インフォーマント調査の結果、(1c,d)に関して Cattell (1984) らと異なり与格構文も容認されることを確認した。また、Kearns (2002) の TLV 認定テストに基づいて (1e) タイプで補部名詞ができごとを表す場合と結果名詞の場合で意味合成過程が異なることを主張する日高 (2007), それを修正した由本 (2021) も踏まえて、(2) の に対する解答として (3) を示した。

- (3) a. (1e)で補部名詞ができごとを表す場合のみ軽動詞として、その他はすべて 本動詞の延長線上で分析すべきである。
- b. (1e)タイプで補部名詞ができごとを表す場合は Complex Predicate Rule (CPR; Jackendoff (1974)) で give と補部名詞の LCS が融合して新たな概念構造を作る一方、結果名詞の場合は補部名詞が give の項として代入されるのみである。(1)のその他の例については基本的に後者の合成の仕方に基づく。また、項の同定は補部名詞の分離不可分所有性によるものである。
- c. CPR は日本語の語彙的複合動詞形成における LCS の融合 (影山(1999), 淺尾 (2007), Hidaka (2011) 等) に相当する。語彙的複合動詞形成はあくまで語彙部門の操作であり、できた複合動詞は強固な形態統語的結束性をもつが、英語軽動詞構文では、意味構造では融合による 1 つの概念構造が作られるが、統語構造では特別な操作はない。概念構造と統語構造を対応関係と捉える Jackendoff (1990) からすると、Kearns (2002) のテストは統語的には本来容認されるべきだか、意味構造上の結束性が強いため、結果として 容認性が下がっていると位置付けられる。
- d. 「具体的な意味」は補部名詞に登録された entity の意味から、「無意識的反応」は動作主の活動が意味構造上抑制もしくは削除されていること、「一般感覚的意味」は、補部名詞が慣習的に持つ (キャンセル可能な) 対人的含意 (例えば shrug における「知らない」「気かけない」等の意味) によって得られる。「補部名詞の動詞形を用いた場合の形式ばって科学的過ぎる感覚」(Curme 1931) は、動詞が主に命題的意味に言及するのに対して、当該形式が補部名詞のもつ慣習的な含意を引き出してそれを聞き手に伝えるという発話内行為を担うことから導出する。

give を主動詞とする軽動詞関連形式の重要な機能を発話内行為の伝達とする本発表の主張が正しければ、主体の感覚や感情の表出等といった慣習的含意を持たないと思われる転換名詞は生起しにくいと予測される。実際に swim や walk, jump 等は give と 共起できず、先行研究では言及のある hiccup も、*Longman Dictionary of Contemporary English* には共起例がない。また、同辞書の記述においては、基体動詞に比べて転換名詞の方が、対人的含意に関わる主体の表出する感情等に関してより詳しい記述が なされている例が散見される。COCA では、give a sniff of amusement/disapproval のように、「匂いを嗅ぐ」というよりも発話内行為の具体的内容を of 句で表した例が多く観察された。このような辞書やコーパスのデータも加え、本論の主張の妥当性を補強した。

以 上